

大会報告書 2022 年秋季研究発表大会

大会実行委員長

早稲田大学環境総合研究センター 研究院教授 永井 祐二

1. 概要

本年度 2022 年秋季研究発表大会は、「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」を教旨とする早稲田大学を会場として開催させていただきました。



写真 1 早稲田大学キャンパス

早稲田大学における P2M の発表大会は、2019 年 4 月^[1]、2020 年 10 月^[2]に引き続き 3 回目となり、頻繁に本学をご利用いただいております。2019 年は平常運営、2020 年はコロナ禍における初のハイブリッド配信、そして今回は会場での発表と会場メインの配信となりました。

この 3 回の大会では、大会運営方式の重心が、リアル空間からバーチャル空間、そして今回は再びリアル空間に戻っていきましたが、決して元の姿に戻るだけでなく、参加者にバーチャルな参加を容認したことで、学会機能の可能性も広がっているように思います。他の学会がコロナ感染状況の悪いとき

はそれを理由に中止し、活動が停滞しがちであったようですが、P2M はポスト・コロナの社会に適合すべく進化を遂げることができたと思います。

大会テーマは、『さまざまな社会課題に挑む地域コミュニティにおける協働と共創の P2M ～地域社会の中長期的な展望をマネジメントする～』ということで、昨今、学会報告でも件数を伸ばしている地域に関する P2M の可能性を議論すべく設定しました。

2. 研究報告会

学会発表の方でも、発表総数 14 件中、7 件が地域の課題や社会変革に対するプログラム、プロジェクトとなり、企業やシステム開発のマネジメントからマネジメントの対象を拡張しつつあります。また今回、特別に W トラックなるものを設けていただき、早稲田大学のメンバーを中心とした地域における P2M 研究チーム^{[3][4]}の特別枠を設けていただきました。



写真 2 発表会場

これまでの P2M 学会でも「超 VUCA な時代^[5]」「アジャイル・ガバナンス^[6]」などがテーマとなり、そのゴールさえも暫定的な絵姿に取り組む P2M のあり方が話題となりましたが、今回の発表においても、従来は感覚的に取り組まれてきた地域コミュニティの合意形成や活性化の取り組みも、マネジメントの対象としてとらえられ、特に、行政の取り組む社会課題である地球温暖化対応、地方創生、災害対応など、持続的な社会構築のためのフレームに、P2M を適応しようという、意欲的な発表が見られました。

社会課題への適応は、地域のさまざまなアクターと共に取り組む協働と、そこから新しい価値を生み出す共創が求められており、以前にも増してマネジメントの重要性が指摘されています。そして、社会のミッションを、どのように個人にブレークダウンするかなど、興味深いテーマが見受けられました。

3. 座談会

発表のセッションの後に実施した「社会の変化に対応した P2M の適応性と有効性」についての座談会では、司会を早稲田大学上級研究員・本学会評議員の岡田久典先生にお引き受け頂き、



写真 3 座談会

本学会理事・副会長の久保裕史先生からの「外国人共生社会実現」という話を皮切りに、P2M の社会課題への適応と課題を、リレートークいただきました。

地域のマネジメントにおける合意形成の難しさ、立場を超えたビジョンの共有など、様々な経験を持ち寄っていただくことができました。40分弱の座談会でしたが、久しぶりにリアルな会場で活気のある意見が交わされたことをうれしく思います。

4. 基調講演

また、午後の基調講演、パネルディスカッションにおいても、その視点は引き継がれ、元湖南省市市長の谷畑英吾先生からは、トップマネジャの視点から社会の課題解決への取り組みを鋭くえぐり、同時にトップマネジャの孤独と悲哀をお話しいただきました。

続いての基調講演は、福島県浜通りの弁護士である菅波香織先生から、浜通りでの廃炉と復興に関する合意形成の難しさと、多様な主体による対話の継続の取り組みについて、実際のエピソードも交えて、心を揺さぶられるお話しをいただきました。



写真 4 谷畑氏の講演



写真 5 菅波氏の講演

両先生からのお話には、中長期的なスパンで取り組む必要がある課題や、場合によっては世代を渡る未来世代をもステークホルダーとした課題まで、社会課題はその複雑性を増していることをお話いただき、まさに P2M の取り組むべき方向性を示していただいたように思います。

5. パネルディスカッション

パネルディスカッションでも、パネリストに地域の現場で実践的な活動をされている。嶋田俊平氏（株式会社さとゆめ代表取締役）、小泉勇輔氏（嘉麻市役所総合政策課・早稲田大学政治経済学部学生）に議論に参加してもらい、現場のマネジメントの苦労や面白さを語っていただきました。



写真 6 パネルディスカッション

パネルディスカッションの司会は、実務者教員として同志社大学で教鞭を執っておられる大和田順子先生にお願いしました。本マガジンでも、大和田先生には、これらの議論をご報告いただいておりますが、軽快な議論回しで、観客を知的に楽しませていただきました。

地域で実践されているメンバーに加えて、本学会理事の和田義明先生に入っていたいたのですが、直感的で経験的な議論になりがちな実務者同士の対話の要所要所に、P2M としての視点を的確に解説いただき、深みのある経験者の芳醇な話の旨さに、ピリリと辛みの利いたテストが加わったディスカッションとなりました。



写真 7 和田氏に感謝

6. 謝辞

大変有意義な大会の全体セッションとなり、タイトルにあるように地域や社会の課題に対する P2M の可能性や有用性を実感することができました。この場をお借りしまして、ご登壇いただきました皆さま、研究発表をいただきました皆さま、すべてのご協力いただきました皆さまに感謝申し上げます。

7. 最後に

なお、大会終了後は、ごく限られた関係者の皆さんでささやかな懇親会を実施いたしました。コロナ禍でなかなかリアルにもつことができなかつた機会を、感染対策に万全の対応で取り組み、なおかつ美味しいと評判の『沖縄料理 Hiro's Café』を貸し切って実施させていただきました。現場の感染のリスクをお店も参加者も全員が共有した場において、新しい出会いもあり、新たなプロジェクトへの拡張性もあり、そして少し酔いしれて、議論は複雑性と不確実性を増していきました

文末に我々早稲田の研究チームのことで恐縮ではございますが、本会のP2M マガジンの編集委員としても参加させていただいておりました研究助手の中山唯が、この大会を最後に退職いたしました。短い期間でしたが、本会のご関係の皆さまには大変かわいがっていただきまして、本人に成り代わってお礼申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

- [1]岡田久典, 永井祐二「第 27 回国際 P2M 学会春季研究発表大会結果報告」P2M マガジン 7 巻, p. 13-17, 2019
- [2]岡田久典, 永井祐二, 中川 唯「第 30 回国際 P2M 学会秋季研究発表大会結果報告」P2M マガジン 10 巻, p. 68-72, 2020
- [3]永井祐二, 中野健太郎, 李洸昊「地域課題解決型プロジェクトの実践と P2M 適応の実情について」P2M マガジン, 13 巻, p. 81-85, 2021
- [4]永井祐二, 中野健太郎, 李洸昊「世代を渡る長期的な社会的課題に対する P2M の重要性について」P2M マガジン, 12 巻, p. 122-126, 2021
- [5]当麻哲哉, 白坂成功「第 31 回国際 P2M 学会春季研究発表大会 結果報告」P2M マガジン, 13 巻, p. 89-92, 2021
- [6]内平直志, 三宅由美子「第 32 回国際 P2M 学会秋季研究発表大会結果報告」P2M マガジン 14 巻, p. 82-83, 2022

2022 年 12 月 19 日 原稿受理